

第1号様式・その1(第4条関係)

戸田市議会研修・視察報告書(会派名: 令和会)

遠藤英樹 議長 様

令和1年7月17日
報告者氏名 峯岸義雄

実 施 日	令和1年7月1日(月) ~ 令和1年7月2日(火) 泊2日	
参 加 者	1 伊東秀浩 6 2 山崎雅俊 7 3 奇藤直子 8 4 峯岸義雄 9 5 林冬彦 10 合計 5 人	
視察先・目的	視察先 目 的 1 佐賀県唐津市議会 「議場傍聴席における音声認識モニター設置について」 2 佐賀県多久市議会 「友好都市事業について」 3 佐賀県多久市教育委員会 「ICT教育について」 4 5 6	
宿 泊 場 所	1 多久シティホテル松屋 2 3	
費 用	宿 泊 費 (1 泊 1 食) 31,300 円	夕 食 代 19,620 円
	交 通 費 216,000 円	昼 食 代 12,820 円
	そ の 他 12,604 円	合 計 292,344 円

令和元年 7 月 1 日 (月)

佐賀県唐津市議会視察報告

1. 視察の目的

議場ならびに公共施設のバリアフリー化が求められている現在、戸田市議会では、聴覚障がいをもつ議員に配慮して、手話通訳ならびに音声自動文字化システムを導入しているが、年間を通して使用した結果、音声自動文字化システムについては、その文字変換精度について、十分に満足できる段階には達していないという声が聞かれている。また、先の令和元年 6 月定例会開催時における議会運営委員会において、市政モニターの方から「傍聴席にスクリーンを設置して、そこに音声変換文字や映像資料などを映し出せるようにしてはどうか」というような内容の意見をいただいたことが報告された。

このような中、佐賀県唐津市議会で、佐賀県初となる「傍聴者向けの音声自動文字化システム」が 6 月定例会より議会導入されたとのニュースに接した。唐津市議会が導入した音声自動文字化では「UD トーク」というアプリが使用され、その音声自動文字化の精度もかなり高く、傍聴者に対してリアルタイムに音声変換文字をみせることができるものであるという内容であった。

そこで、実際の現場と使用状況を見せていただきながら、①UD トークの概要、②傍聴席設置のシステムの概要、③傍聴席設置のシステムの構成及び経費、④音声認識アプリの利点と問題点、⑤UD トーク導入までの経緯、⑥今後の可能性、等を実務者より伺い、戸田市議会における「音声自動文字化システム」のあり方についてと、傍聴者向けの情報提供のバリアフリー化について、知見を得て、議会改革提案の一助とすることを目的とする視察を行った。

2. 視察概要

テーマ : 傍聴者向けの音声自動文字化システムについて

視察日 : 令和元年 7 月 1 日 (月曜日)

場 所 : 唐津市議会会議室

配付資料 : ①唐津市政概要

②傍聴者向けの音声自動文字化システムについて (パワーポイント資料)

③UD トーク実験用シナリオ

説明者 : 濱口智議会事務局長

田中秀和市議会議長

参加議員 : 戸田市議会令和会議員 (伊東秀浩・山崎雅俊・斎藤直子・峯岸義雄・林冬彦)

3. 視察の内容

- (1) 市議会議長より挨拶があった。
- (2) 令和会団長より返礼挨拶があった。
- (3) 議会事務局長より、資料①をもとに唐津市政概要の説明があった。
- (4) 議会事務局長より、資料②をもとに「傍聴者向けの音声自動文字化システム」について、説明があった。主な内容については添付資料②を参照されたい。その後、質疑応答があった。
- (5) 唐津市議会議場に移動し、システムの配置を見て、UD トーク体験をした。

4. 視察より得た知見

(1) UD トークの主な機能

- ・ 音声認識技術を使って会話やスピーチをリアルタイムに文字化
- ・ 自動翻訳技術を使って指定の言語にリアルタイムに翻訳
- ・ 音声合成機能による内容の読み上げ
- ・ 音声認識の単語登録が可能（日本語のみ）
- ・ QR コードをカメラで読み取り、アプリ同士を接続した会話のやりとりが可能

(2) システム構成

- ・ 音声認識アプリ UD トーク
- ・ タブレット（スマホも可）
UD トークアプリを iPad、Android タブレットにインストール

(3) アプリ無料版と有料版の違い（唐津市議会是有料版の法人契約）

- ・ 無料版は個人利用のみ
- ・ サポートの有無
- ・ 音声自動文字化の処理サーバが異なる
有料版はデータ処理集中しても詰まることはない
- ・ 無料版は 30 分で切れる

(4) 経費

- ・ 1 拠点において台数制限なしで利用可能
- ・ 初年度経費 初期費用 54000 円＋利用料金 311,040 円の計 36 万 5040 円
2 年度以降 利用料金 311,040 円（消費税 8%の場合）

(5) 実際に体験して感じた特徴

- ・ 音声自動文字化の変換スピードが速く、変換精度も高い
- ・ 文字化された日本語には「ルビ」も振られることから、誤変換であっても意味を類推しやすい
- ・ 音声自動文字化された日本語は、即、外国語に翻訳することも可能
（多言語にわたる）
- ・ 複数のマイク（端末）を接続して、会話形式で音声自動文字化することも可能

なお、唐津市議会を実際に傍聴した聴覚障がい者の方々からは、「今まで議会での議論をリアルタイムに知ることはできなかった。多少の誤変換はあっても、ルビから類推できるし、発言が即文字になって見られることが大変喜ばしかった」という感想を得たと伺った。

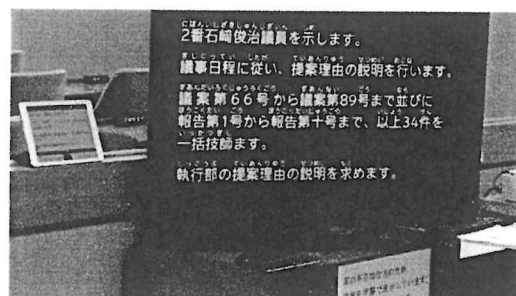
5. 考察

文字変換のスピードと精度、システム構成の簡便さ、議場以外でも使えること、外国語への即翻訳機能、導入・維持費用といった面から、戸田市議会で現在採用している音声自動文字化システムと比較検討するに足るシステムだと思われる。

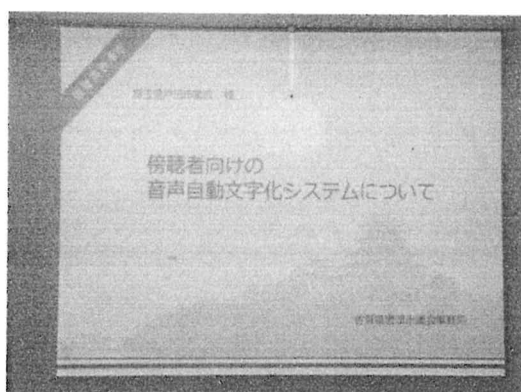
唐津市議会では、今後、この音声自動文字化システムを、聴覚障がい者等の窓口対応支援にも使うことや、日本語と外国語の 2 言語同時に表示する機能をつかったの講演会や式典などでの多用途利用に供することを検討している。そのような可能性も、戸田市議会・戸田市にとって役立つと思われる。



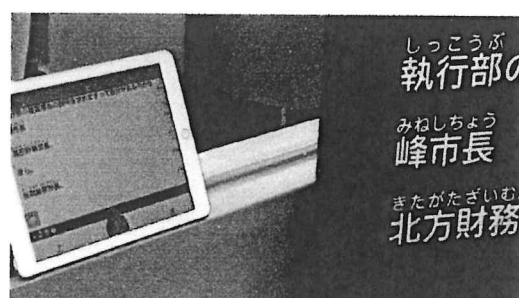
唐津市議会入口にて令和会議員一同



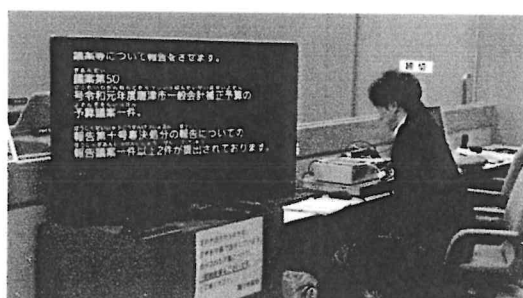
音声変換された日本語にはルビが付く



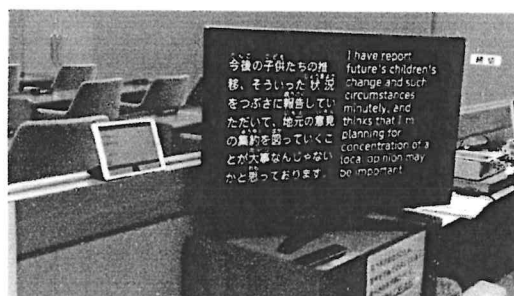
説明時のプロジェクター画面



この iPad で UD トークが稼働している



傍聴席に設置されたモニタ (42 型)



音声自動変換文字を外国語に即翻訳
2 画面表示もできる

令和元年 7 月 2 日（火）

佐賀県多久市視察報告

友好都市事業について

1. 視察の目的

戸田市は、現在、オーストラリア国のリバプール市、中華人民共和国の開封市と友好都市関係を締結し、主に、子供たちのホームステイ留学や市民相互交流、議会相互交流を行なっている。

今回、視察先に選んだ佐賀県多久市は、戸田市と同じ中華人民共和国に友好都市交流を定期的に行っているが、特に文化に関する交流をきっかけにして、多久市の地域資源である「江戸時代から続く『論語』のまち」という面を深化・発展させ、子供たちの自己肯定感の高まりや、郷土に対する愛着を強めるという効果を生んでいる先進都市である。

友好都市交流をきっかけに、子どもの教育や郷土愛育成に波及効果を生んでいる多久市を視察することで、戸田市のこれからの友好都市交流のあり方について知見を得ることを今回の視察の目的とする。

2. 視察概要

テーマ：友好都市事業について

視察日：令和元年 7 月 2 日（火曜日）午前 9 時から正午

場所：多久市「東原庠舎（とうげんしょうしゃ）」・多久聖廟（孔子廟）

「東原庠舎」は江戸期に多久に設けられた学問所であり、現在の東原庠舎はかつての東原庠舎跡地の近隣に建てられた記念館であり、かつての東原庠舎を伝える施設となっている。

配付資料：①友好都市（中国曲阜市）について（パワーポイント資料）

②釈菜の舞導入の経緯について

説明者：①友好都市（中国曲阜市）について：白濱直子次長

②釈菜の舞導入の経緯について：福島健係長

参加議員：戸田市議会令和会議員（伊東秀浩・山崎雅俊・斎藤直子・峯岸義雄・林冬彦）

3. 視察の内容

（1）市議会議長より挨拶があった。

（2）令和会団長より返礼挨拶があった。

- (3) 多久市長が会場に到着された。
- (4) 資料①をもとに多久市と中国曲阜市との友好都市交流について説明があった。
- ①友好都市盟約までの経緯について
 - ②市民の交流について
- (5) 資料②をもとに「釈菜の舞導入の経緯」について、説明があった。主な内容については添付資料②を参照されたい。

(4) (5) の主な内容は次の通りである。

江戸時代の1708年、多久4代領主・多久茂文によって建てられた聖廟。学問の祖・孔子をお祀りしている。当時、多久領民の心が荒れていたことに心を痛めた多久茂文は、身分の分け隔てなく学べる学問の場「東原庠舎（とうげんしょうしゃ）」と、心の修養の場「多久廟」を多久の地に設けた。

日中国交回復後、民間交流が始まり、多久市においても「多久市日中友好協会」が設立され、訪中団（市長、市議、日中会員）が結成された。北京、済南、泰山、曲阜、蘇州、上海などを訪問する中で、多久市の友好都市締結先は、多久聖廟に祀られている孔子聖誕の地である中華人民共和国曲阜市（きょくふし）に絞られた。

多久市は曲阜市と、平成5年（1993年）に友好都市を締結。その後、多久市日中友好協会を中心とする、多久市と曲阜市との草の根交流が始まった。

平成5年、財団法人孔子の里（現、公益財団法人孔子の里）常務理事が、曲阜市の孔子祭を視察した際に、中国で孔子を祀る時に踊られる釈菜（せきさい）の舞を観たことがきっかけとなって、多久市で釈菜の舞を行うことが検討され始めた。

平成7年に、日本船舶協会補助金を活用して、釈菜の舞調査団が訪中し、釈菜の舞の指導者を多久市へ招聘し、芸能保存会のメンバーに指導いただいた。その時点では、釈菜の舞の前半部分のみが多久市に伝えられた。

平成16年に、民間交流20周年・友好都市10周年を迎えた際に、再度の訪問団派遣と中国からの釈菜の舞の指導者来訪が行われ、釈菜の舞の後半部分も多久市に伝えられた。

曲阜市の釈菜の舞指導者が多久市に来訪した際、中国では文化大革命の際に昔から伝えつたえられてきた孔子聖廟の多くが毀損されたこともあって、多久市が大事に孔子を祀った聖廟が江戸期から今日まで大事に伝えられてきたことを知って感動されたそうである。

以後、毎年春と秋にこの多久廟で「釈菜（せきさい）」という感謝を捧げる祝祭が行われている。踊り手は主に地元の高校生。雅楽を演奏するのは市の職員たちである。

(6) 質疑応答があった。

(7) 東原庠舎から移動し、江戸時代から多久市に伝わる「多久聖廟（孔子聖廟）」と
曲阜市から多久市に送られた孔子像を視察し、説明を受けた。

4. 知見と考察

多久市では、友好都市・曲阜市との交流を進めた結果、多久市に江戸時代から伝えられてきた「多久聖廟（孔子廟）」を強く意識するようになった。そして、論語文化を軸とし、さらにその文化度を子供の時から深めていく試みが行われている。小中学生は論語カルタ、高校生は釈菜の舞。それらの活動を大人たちが支え、さらには全市民を対象とした「論語検定」が行われている。

また、同時に、多久聖廟と同時期に開設された、論語を元とする「朱子学」の学問所である「東原庠舎」にも光をあて、そこで学び、世に出て、明治期の日本を支えた人材を郷土の誇りとして意識することを含めた郷土学「多久学」という取り組みを行っている。

外の文化圏と交流することで、かえって自分たちのご先祖様が伝えてきた文化を意識し、郷土に縁を感じ、誇りと自己肯定感を持つ。そんな動きが多久市で生まれていた。

戸田市も中華人民共和国開封市と友好都市を締結しており、子供たちのホームステイ留学や市民交流、議会交流を行なっているが、多久市のように、交流事業を行なった結果、郷土を強く意識するようになるという効果は、まだ全市的には生まれていない。

交流をきっかけに「郷土愛」「誇り」「自己肯定感」を高める仕組みづくりを意識しながら、戸田市のこれからの友好都市交流のあり方や進め方を考えていく必要があると強く感じた。

(報告者 令和会 斎藤直子)



東原庁舎内研修室にて
令和会議員一同と多久市説明者



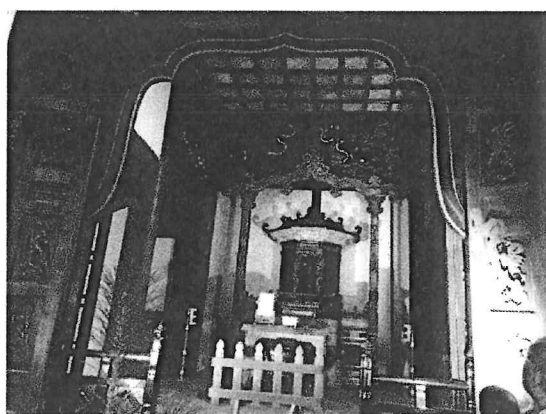
説明を聞く令和会議員



多久聖廟（孔子廟）を市長の案内で見学



曲阜市より多久市に贈られた孔子像



江戸期より伝えられてきた孔子像



横尾市長自ら説明くださる

令和元年 7 月 2 日（火）

佐賀県多久市視察報告

多久市の教育について

1. 視察の目的

戸田市は、現在、教育改革を推進中であり、カリキュラムにおいては PEER 教育の実施、セサミカリキュラムを初めとした非認知スキルの修得などに取り組んでいる他、部活動の在り方等を含めた、教職員の働き方改革にも取り組んでいる最中である。戸田市教育委員会の取り組みは、他地域からも視察が相次ぐ先進的なものとして知られているが、他の先進自治体に学ぶ余地もまだあるのではないかと考える。

今回、視察先に選んだ佐賀県多久市は、先日、東京・青海展示場で開催された第 10 回学校・教育総合展においても横尾市長自ら多久市の ICT 教育について講演されていたように、この分野における先進自治体として知られている。加えて、ICT を活用し教職員の働き方改革にも取り組んでいる。また、市内の小中学校を複数の義務教育学校に再編し小中一貫教育を実施、あわせてコミュニティ・スクール制度を導入している自治体である。

ICT 教育、教職員の働き方改革、小中一貫教育、コミュニティ・スクール制度など、多久市に学ぶことで、戸田市の教育改革のさらなる充実について知見を得ることを今回の視察の目的とする。

2. 視察概要

テーマ：ICT 教育について

視察日：令和元年 7 月 2 日（火曜日）午前 1 時から 3 時

場所：多久市役所。

配付資料：多久市の教育について（FAX）

説明者：多久市長 横尾俊彦

多久市教育委員会学校教育課 石田俊二課長

多久市教育委員会学校教育課企画係担当 太田真課長補佐

多久市教育委員会学校教育課 居石（すえいし）伸弘指導主事

参加議員：戸田市議会令和会議員（伊東秀浩・山崎雅俊・斎藤直子・峯岸義雄・林冬彦）

3. 視察の内容

（1）多久市教育委員会より挨拶があった。

- (2) 令和会団長より返礼挨拶があった。
- (3) 多久市長が会場に到着された。
- (4) 資料をもとに、本日の研修のキーワードについて、石田課長より説明があった。
キーワードは「伝統ある実践・多久学」「コミュニティスクールの実践
(特に『自己肯定感』、その狙いの中でICT教育がある)
- (5) 資料をもとに、居石指導主事より、多久市の教育について、説明があった。
質疑応答などでは、横尾市長も説明された。
主な内容については添付資料「多久市の教育について」を参照されたい。

1) はじめに

- ・約300年前に多久に開かれた学問所「東原庠舎（とうげんしょうしゃ）」の歴史的説明
- ・現在、3校ある義務教育学校の校名には、
それぞれの最初に「東原庠舎（とうげんしょうしゃ）」を冠している。

2) 多久市の教育のキーワードは「自己肯定感」、郷土学「多久学」の実践

- ・孔子の教えが息づく多久市では、現在、郷土学としての「多久学」を核に、平成25年度から小中一貫教育、平成28年度からコミュニティ・スクールの取り組みを進め、平成29年度からは義務教育学校に移行した。
- ・「多久学」の理念は、地域に誇りをもち地域をスタートとして世界に羽ばたくこと。
- ・多久学として、「論語カルタ・論語検定の実施」「郷土の賢人の学習」「伝統行事への参加」「史跡・特産物の学習」などを行っている。

3) コミュニティ・スクールから義務教育へ

- ・異学年の交流が活発になり、子どもたちが落ち着いてきた（特に中学生）
- ・三間「時間、空間、仲間」の減少が危惧されていることから部活にも力を入れる
- ・健康増進の取り組み

4) 多久市教育の基本方針と施策目標（資料5頁～参照）

- ・目指す目標は「自己肯定感に満ちた子」
- ・義務教育学校では「区割り」を重視
低学年：1～4年 学習の基礎・定着
中学年：5～7年（小学5年生～中学1年生） 学習の充実・深化
高学年：8～9年（中学2～3年生） 進路の選択 学習の発展・活用

- ・「学び舎」という位置づけ「知・徳・体」のバランスを重視

知：学力向上、英語教育、教育情報化

徳：多久学（論語・郷土教育）、人権・同和、特別の教科、道徳

体：体力向上（部活動・健康教育）

5）多久市の ICT 利活用の推進（資料 8 頁参照）

- ・特筆すべきは、平成 30 年度から「学び方改革及び働き方改革の一環としてテレワークの導入」を行ったこと。
- ・テレワークの導入は、フルクラウド環境の導入で実現した。
- ・セキュリティ研修を重視して行っている。

6）全国初となる「学習系・校務系のフルクラウド化」で、

常に「最新」が使える教育 ICT 環境を実現（資料 11 頁～参照）

- ・先生のパソコンにはデータは残らないので、先生方が安心して、パソコンを持ち出し、自宅等で仕事をするできるようになった。
- ・先生がた同士や学校間で、誰かが作った教材が共有利用されるようになった。
- ・ペーパーレスの会議が当たり前になった。
- ・多久市をはじめ、佐賀県では電子黒板が標準なので、パソコンから電子黒板に直接映し出すスタイルが標準。
- ・以前と比べて、中学校で年間 16 時間、先生方に時間の余裕が生まれた。
- ・管理職の時間の削減（特に教頭先生）が実現した。
- ・定時退勤日が守られるようになった。

4. 知見と考察

ICT 教育をテーマにした、午後の多久市視察研修では、「自己肯定感」「多久学」「フルクラウド化で実現した教職員の働き方改革」が特に印象的だった。

「自己肯定感」は、多久市における9年間の一貫教育の中での目標である。

「多久学」は、多久市の歴史と強くリンクしており、論語を題材にした「論語カルタ」を使うことで中学生で100の論語を暗唱できるようになり、子供たちの道徳的感性にも論語の教えが根付くようになる。また、孔子廟と同時期の約300年前に開設された「東原庠舎」から多くの偉人が世にでて、明治維新後の日本を支えたという史実を学ぶとともに、郷土に残る史跡や特産物の学習を行うことで、多久市の子供たちは先人への憧れと郷土への誇りや愛着を感じるようになるのだと思った。

これら「自己肯定感」と「多久学」が結び付き、「地域に誇りをもち地域をスタートとして世界に羽ばたく」人材をつくっていかうというのが多久市教育の思いである。

一方、教職員においては、全国初となる「学習系・校務系のフルクラウド化」により、常に「最新」が使える教育ICT環境が実現された結果、教職員の働き方改革、特に教頭先生の勤務時間削減に繋がったことに驚きを禁じ得なかった。

全国的に、コミュニティ・スクール導入に伴い、教頭先生の勤務時間削減が大きな課題とされているが、この分野で結果をだせるのが「フルクラウド化」環境であることが示された。

戸田市の教育においても、全国的に注目される様々な先進的な取り組みが行われているが、「自己肯定感を生み出すための仕組み」開発や「学習系・校務系のフルクラウド化」は、戸田市の教育の質をさらに一段押し上げるものである。この辺りを、戸田市の現状を踏まえながら、今一度、考えてみたいと思う。

今回の多久市における午前・午後の視察研修では、横尾市長が教育について熱く語られ、説明くださった。横尾市長は、戸田市の戸ヶ崎教育長との親交も厚く、そのおかげだったと思うが、公務多忙の中、戸田市のために時間を割いてくださった、横尾市長はじめ多久市の職員の方々に心より感謝申し上げる次第である。

(報告者：令和会 林冬彦)



多久市長を囲んで令和会議員



多久市のキャラクターは「孔子先生」

戸田市議会研修・視察報告書(会派名: 令和今)

遠藤 英樹 議長 様

令和1年11月11日
報告者氏名 峯岸義雄

実 施 日	令和1年10月15日(火) ~ 令和1年10月16日(水) 1泊2日	
参 加 者	1 伊東 秀浩 6 2 山崎 雅俊 7 3 斎藤 直子 8 4 峯岸 義雄 9 5 林 冬彦 10 合計 5人	
視察先・目的	視察先 目 的 1 稚内市役所 「地域担当職員制度について」 2 札幌市役所 「ワーキングステーションについて」 3 4 5 6	
宿泊場所	1 アパホテル<札幌すすきの駅西> 2 3	
費 用	宿泊費(1泊1食) 42,500 円	夕食代 24,500 円
	交通費 298,050 円	昼食代 12,770 円
	その他 5,184 円	合 計 383,004 円

令和元年 10 月 15 日（火）

北海道稚内市視察報告

地域担当職員制度について

1. 視察の目的

現在、戸田市には計 46 の町会・自治会がある。市民が地域に関わることは地域愛の醸成や地域での助けあい、防災力の向上や地域美化など、自治力の深化に繋がることから、戸田市は神保国男（前）市長の頃より、何らかの形で地域に関わるきっかけとなる地域活動の育成や町会・自治会の支援など、コミュニティの育成に力を注いできた。その結果、戸田市は市と市民の間の距離が近いという感想をもつ市民が増えてきた印象がある。これらの状況を踏まえ、現市長は、施政方針に「地域担当職員制度」が掲げ、町会・自治会に担当職員を配置する構想をもっているが、具体的な取り組みはまだ見られない状況にある。

今回、視察先に選んだ北海道稚内市は、地域担当職員制度を導入した先進自治体である。68 の町会があり、これらをブロックに分けて、地域担当職員を配置してきた。

この度、稚内市を視察することで、戸田市のこれからの地域担当職員制度のあり方について知見を得ることを今回の視察の目的とする。

2. 視察概要

テーマ：地域担当職員制度について

視察日：令和元年 10 月 15 日（火曜日）午後 2 時から 4 時

場所：稚内市役所議長室

配付資料：稚内市まちづくり委員会（稚内市提供のパワーポイント資料）

説明者：地方創生課 遠藤直仁課長

参加議員：戸田市議会令和会議員（伊東秀浩・山崎雅俊・斎藤直子・峯岸義雄・林冬彦）

3. 視察の内容

- （1）渡辺直人・稚内市議会事務局長より挨拶があった。
- （2）令和会団長より返礼挨拶があった。
- （3）資料をもとに、稚内市の「地域担当職員制度」について説明があった。
- （4）質疑応答があった。

（3）（4）の主な内容は次の通りである。

（地域担当職員制度導入の背景とこれまでの動き）

地域担当職員制度を導入した背景には、地域と行政による協働のまちづくりが進む流れの中で、地域問題は地域で解決しようという意識があった。

当時、稚内市内には 68 の町内会があったが、各町会にある会館などの施設の老朽化による建替需要もある中で協働のまちづくりを進めるには、68 の町内会をもう少し大きな単位に統廃合する必要があった。そこで、全体を 15 のブロックに分け、それぞれに「まちづくり委員会」をつくり、この委員会がその地区のまちづくりを担う主体となった。

まちづくり委員会は、地域住民（20 人以内）と市役所の地域担当スタッフ 5 人から構成される。地域担当スタッフは、地区長 1 人（管理職）、副地区長、職員 3 人からなる 5 人である。

まずは、稚内市の天北地区から始動した。

まちづくり委員会では、地域の課題を、直ぐにできることと中長期的に取り組むべきものに分類。これまでに、小中学校の統合や、廃校校舎を自然学習施設に改変活用、散策の森復活などを実現してきた。財源もできるだけ、地域におろし、たとえば自然学習施設は教育委員会の予算を活用し、散策の森の中の散策の道は宝くじ助成金を活用して整備した。

15 ブロックそれぞれにこのような活動を続けてきたが、さらにそれぞれのまちづくり委員会を支援するために、活動支援センターを 4 箇所整備した。

（これまで地域担当職員制度を行ってきた問題点）

- ・ 15 地区にまちづくり委員会を設置してやってきたが、地域によって活動意欲に温度差があり、また構成員の高齢化などから、まちづくり委員会が機能しているのは、実質 11 地区である。
- ・ プロジェクト以外の通常活動に対する補助は、年額 7 万円であり、なかなか活動を拡げることが難しい。
- ・ 全体を 15 ブロックにわけて取り組んだが、それによる町内会の統廃合は進まなかった（まちづくり委員会とは関係なく 3 町内会の合併はあった）。
- ・ 稚内市の「協働」は、稚内市（行政）と市民の協働であり、議会はここに関わっていない。まちづくり委員会の構成員にも議員がはいっていない。
- ・ 地域担当職員制度をつくって、職員を配置したが、職員を経由して地域の声を吸い上げて、それを稚内市の施策に反映させたり、市の諸計画と連動させたりするというよう

な仕組みはない。

・15のまちづくり委員会（実質11のまちづくり委員会）間の交流はなく、連携がとれていない。

4. 知見と考察

地域担当職員制度の先進地・稚内市を視察してわかったことは、「地域問題は地域で解決しようという意識」とそれをサポートするために課題抽出・解決方策の提案などのノウハウをもつ職員をその地域専従として担当させて「地域をサポートする」という地域担当職員制度という着想はよいものの、次の様な課題が解決されないと、それは単に地域の自治組織運営のお手伝いで終わってしまいがちになるということである。

（１）地域のまちづくりを担う組織（まちづくり委員会）構成員の世代交代がなされないと、結果、高齢化が進行し、地域のまちづくりへの意欲や行動力の低下を招く。

（２）まちづくりを担う組織同士の交流（情報交換・人材交流）がないと、それぞれの地域で積み重ねたノウハウが共有されず、またそれぞれのブロックが協力しながらまちづくりを進めようという動きにも繋がりにくい。

（３）地域の課題を地域担当職員が吸い上げ市全体の計画や施策に反映させる仕組み（加えて、議会の関与）がないと、行政と地域が一体になった動きにはなりにくい。

したがって、戸田市において「地域担当職員制度」を導入するならば、上記３点の課題を踏まえた制度設計を行う必要があると思われる。加えて、稚内市の場合は、戸田市と異なり、町内会への加入率も高いことから、町内会（がいくつか集まってできたブロックのまちづくり委員会）の運営をサポートすることで、市と地域が一体になった動きに繋がる効果は期待できたが、戸田市の場合は、町会・自治会への加入率は高いとはいえないことから、「町会・自治会への加入促進」ということを４点目の課題として踏まえる必要があると思われる。

地域担当職員制度の導入は、行政側で職員の担当地域割りを決め派遣するだけでは効果を上げにくいものであるということがわかった視察研修であった。

（報告者 令和会 林冬彦）



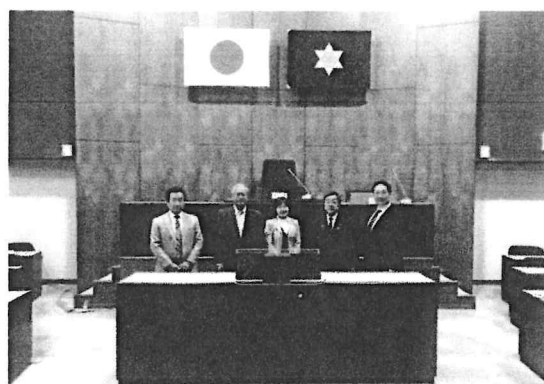
会場となった議長応接室
稚内市側から提供された資料を
タブレットにいれ閲覧しながら
説明を聞く



議長室に掲示されていた日本地図。
常識にとらわれない発想を引き出す、
日本海側から発想する重要性を
感じさせるものであった



議長室の側面には、樺太（サハリン）を
通じたロシアとの交流も伺える展示が
あった。



稚内市議会議場にて
令和会議員一同

令和元年 10 月 16 日（水）

北海道札幌市「一般社団法人さっぽろスポーツ健康財団」視察報告 ウォーキングステーションについて

1. 視察の目的

戸田市は若い世代が多い街として知られているが、一方で高齢化も進んでおり、この 10 年間で、人口に占める一人暮らしの高齢者割合は 3 倍になったという実態がある。そんな中、市民の健康づくりのための環境整備は、戸田市にとって重要な課題のひとつであり、市としても町会や自治会を中心に TODA 元気体操やリズム体操の普及、荒川水循環センター上部公園のパークゴルフ場整備、シルバースポーツ大会の実施を図るなど、市民、特に高齢者を外に連れ出し、楽しみながらスポーツを通じた健康づくりを行う施策を行ってきた。このような状況を背景に、私たち戸田市議会令和会では、昨年度、パークゴルフ場視察（北海道札幌市）や総合スポーツクラブ視察（愛知県豊橋市）などを行い、戸田市の状況にあうスポーツ環境の整備について知見を深めてきたが、この度、参加にあたっての敷居が低く手軽にできる健康スポーツとして愛好者も多い「ウォーキング」に注目し、札幌市での取り組みを視察研修した。一般社団法人日本ウォーキング協会 (<https://www.walking.or.jp/>) によるウォーキングの拠点「ウォーキングステーション」を自治体の中で一番多く有し、積極的にウォーキングスポーツへの市民参加を応援しているのが札幌市であり、その仕組みと戸田市におけるウォーキング普及への可能性を探ることを視察の目的に設定した。

2. 視察概要

テーマ：ウォーキングステーションについて

視察日：令和元年 10 月 16 日（水曜日）午前 9 時半から 11 時半

場所：札幌市立西区体育館

配付資料：「西区体育館・温水プールウォーキングステーションについて」さっぽろ健康スポーツ財団資料（PDF・令和会に FAX にて事前配布）

説明者：一般社団法人さっぽろ健康スポーツ財団札幌市立西区体育館館長 有馬一郎氏
特定非営利活動法人札幌歩こう会理事長 渡部東司氏
特定非営利活動法人札幌歩こう会理事 石垣太計詞氏

参加議員：戸田市議会令和会議員（伊東秀浩・山崎雅俊・斎藤直子・峯岸義雄・林冬彦）

3. 視察の内容

- (1) 有馬一郎・西区体育館館長より挨拶があった。
- (2) 令和会団長より返礼挨拶があった。
- (3) 資料をもとに、渡部東司・NPO 法人札幌歩こう会理事長より説明があった。
- (4) 質疑応答があった。

(3) (4) の主な内容は次の通りである。

(ウォーキングステーションとは何か)

ウォーキングステーションとは、一般社団法人日本ウォーキング協会が認定するウォーキングコース（イヤーランド認定コース）の拠点となる施設である。ウォーキングの参加者は、ウォーキングステーションで参加手続きを行い、ウォーキングステーションを出発し、公認されているウォーキングコースを踏破することで、その距離が公式認定される。

ウォーキングコースは日本国内のみならず、日本ウォーキング協会が加わる国際ウォーキング組織と共有されており、それぞれのウォーキングステーションで参加手続きを行い公認されているウォーキングコースを踏破することで、参加者は自己のウォーキング記録を積み重ねていくことができる。

日本国内において、ウォーキングステーションは、一般社団法人日本ウォーキング協会に認定される任意の団体により設置・運営されている。今回の視察研修において説明くださった一般社団法人さっぽろ健康スポーツ財団や特定非営利活動法人札幌歩こう会もそれぞれウォーキングステーションを設置・運営している団体である。

それぞれの団体は、ウォーキングステーションを拠点に、歩いて楽しめる通過点を盛り込みながらコースをつくり、(一社) 日本ウォーキング協会にコース認定の申請を行う。その後、申請されたコースを(一社) 日本ウォーキング協会の指導員が実際に歩き、途中にトイレや給水施設があることを確認し、条件を満たしていれば公認される。

なお、ウォーキング参加者は、ウォーキングステーションを拠点とする公認コースを踏破する以外にも、各地で開催されている公式ウォーキングイベントに参加し踏破することで、そのコースに設定されている距離数を自己のウォーキング記録に積み重ねることができる。ウォーキングイベントを開催する場合、主催側のウォーキングステーションは(一社) 日本ウォーキング協会に 30000 円支払い、(一社) 日本ウォーキング協会の指導員が派遣されイベントコースの調査が行われ、コース途中にトイレや給水施設があること等条件を満たしていることが確認された後、認定される。参加者の参加

費（一人あたり 200 円）は主催者の収入となる。また、コース途上に看板等を設置する場合は、主催者は管轄する警察署に道路使用許可の申請することが必要である。

（ウォーキングステーション設置の課題）

ウォーキングステーションは、ウォーキングした距離の公式認定を行う拠点であることから、施設に人が常駐しなければならない条件をもつ（人件費が発生する）。他方、ウォーキングステーションの収入源は、ウォーキングコースを踏破し公認記録を積み重ねたいと思いウォーキングステーションに参加申込みしたり、イベント参加したりする利用者の手数料であり（一人あたり 200 円）、季節によって利用者の多寡もあることから安定した収入を見込みにくく、ウォーキングステーション業務単独でステーションを開設することは難しい。このような事情から、視察先の札幌市西区体育館のように市民の運動・健康増進をサポートする公共施設やウォーキングによる観光客誘致を期待する観光協会が通常業務の傍らウォーキングステーション業務を行ったり、スポーツ関連事業所がウォーキングスポーツの盛り上げを目的とした社会貢献、参加者がついで利用等での物販やサービス購入で本業の売り上げに繋がることを期待しながらウォーキングステーション業務を行ったりする形態がみられる。

（参考）日本各地のウォーキングステーション一覧

<http://ivv-jva.com/walkingstations.html>

なお、公認ウォーキングコースやイベントコース設置の場合、複数のウォーキングコースをまたぐ場合があり、その際の参加料の按分がしばし問題になる。

（特定非営利活動法人札幌歩こう会について）

特定非営利活動法人札幌歩こう会は、つい自宅にひきこもりがちになる高齢者を念頭に、「外に出る」「歩友になる」きっかけになることを願い、ウォーキング活動を広めるために結成された。拠点を置く、札幌市中央区の場合、生まれ育ちが札幌という人、全道から集まった人、本州から来た人がそれぞれ 3 分の 1 ずつを占め、なかなか交流しづらい面もあったが、歩友となることで共通の話題もでき、一緒に活動するようになった。札幌市におけるウォーキング活動については、地元の市議会議員が長野県松本市に視察に出掛け、そこで行われている「ウォーキング指導員」の育成を重視する仕組みを導入したことが、盛んになるきっかけになったと思う。現在、ウォーキング参加者には、パスポートを模したウォーキング記録帳を発行し、日本一周や地球一周（距離）を達成した会員を表彰している。この記録を伸ばしたい、表彰されたいと思う気持ちをサポートすることが、ウォーキングへの参加意欲につながると考えている。

4. 知見と考察

「家に引きこもりがちな高齢者を外に連れ出す」「歩友になって交流を深める」、これらのような目的からウォーキング活動を始めた特定非営利活動法人札幌歩こう会の考え方は、まさに戸田市が高齢者を念頭に推奨する健康増進活動と通じるものである。札幌ではウォーキングへの参加が盛んであることを考えると、戸田市においてもウォーキングを推奨する環境づくりに取り組むことは十分検討すべきものだと考える。

現在、埼玉県では、(一社)日本ウォーキング協会のもと、特定非営利活動法人埼玉県ウォーキング協会が、さいたま市浦和区にウォーキングステーションを設置している(埼玉県は事務所費を補助)ほか、越谷市・熊谷市(両市ともスポーツオーソリティ店舗がステーション)、東松山市(東松山市立ウォーキングセンターがステーション)、鶴ヶ島市(鶴ヶ島市立市民活動推進センターがステーション)、鴻巣市(鴻巣市産業観光館がステーション)、飯能市(朝日新聞販売店 ASA 飯能中央がステーション)、狭山市(狭山市産業労働センターがステーション)にウォーキングステーションが設置されている。戸田市にはウォーキングステーションは設置されていないが、埼玉県ウォーキング協会の浦和区岸町にあるウォーキングステーションを拠点として、戸田市を通過する公認コース「緑道と彩湖コース(20km)」が公認コースとして設置されている。

戸田市がウォーキングを推奨する環境づくりに取り組む場合、①ウォーキングステーションを設立する、②独自でウォーキング推奨施策を検討する、③その他がある。視察を行った札幌市の事例を考えると、公益財団法人戸田市文化スポーツ財団がウォーキングを市民の健康増進メニューと捉えその普及に力を入れたいと考えるか、歩こう会など民間の団体で積極的にウォーキングステーションを拠点としたウォーキング活動を行いたいと考えるところがあるならば、①の取り組みも必要だと考えるが、現状はまだその機運が高まっていないと思われる。ならば②のやり方があるが、その場合は、参加者の参加意欲を継続して高める方策をセットにして取り組みを考える必要がある。同時に、現在、戸田市内にはウォーキング関連の活動団体や企画も複数存在することから、それらの関係者の方々と話し合いながら進めて行く必要がある。③の場合は、たとえば、近年、スマホと連動させて地域似設定された拠点を歩きまわるゲーム(ポケモンGOの基盤となったゲームである「インGRESS」等)があり、実際に自治体でインGRESS(ingress)を提供するナイアンテック社と提携してイベントを組み世界各国から参加者を集めている事例も多くあることから、そのような取り組みを検討すること等が考えられる。

(参考)

NPO 埼玉県ウォーキング協会

<http://www.saitama-walking-kyokai.jp/>

インGRESS (ウィキペディアによる解説)

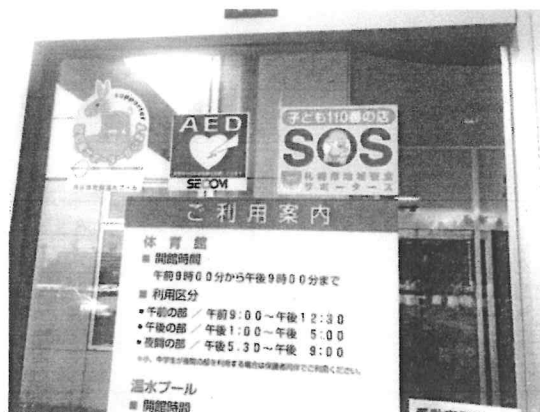
<https://ja.wikipedia.org/wiki/Ingress%E3%82%A4%E3%83%99%E3%83%B3%E3%83%88>

今回、視察研修でお話いただいた NPO 法人札幌歩こう会の渡部東司理事長はご高齢にもかかわらず、大変意欲的で元気そうに見られた。進める上での課題はいろいろあるものの、戸田市においても、ウォーキングしやすい環境づくりに取り組みたかった。

(報告者 令和会 林冬彦)



札幌市西区体育館（遠景）



札幌市立西区体育館入口の掲示
地域の健康サポート・認知症ケア施設
にもなっている。



札幌市西区体育館（入口）



ウォーキングステーションであるという
標示（ここでコース参加の手続きを行う）



視察研修に参加した令和会議員一同



西区体育館内会議室にて